



多くの人にぎわいました/ 見て・考えて・学べる ブースをご紹介！

ステージ上演前には、認知症にまつわる多彩な体験型プログラムや情報を得られるブースが設けられ、たいへん賑わいました。認知症の予防には要介護状態になることの予防が不可欠です。介護予防の3本柱は①運動、②食事、③社会参加（人や社会とつながること）です。それに加え、認知症予防のためには脳が活性化することを生活に取り入れることが大切です。昔懐かしい記憶を呼び起しながらコミュニケーションをとることや、五感や手先を使う作業によって、脳が活性化するとされています。また、肌や身なりが整うことや、肌に触れる心地よさによって笑顔やコミュニケーションが生まれます。シニア世代の方々だけでなく、認知症の人を支える周りの人にとっても、認知症ケアの学びになるブースでした。

認知症や介護の相談窓口

地域包括支援センター	連絡先
ふてんま	943-4165
かいほう	942-8377
ぎのわん	896-1339
ふれあい	897-4165

お気軽にご相談ください♪

問 介護長寿課 ☎内線4139

来場者の感想を一部ご紹介



「新しい認知症観」とは？

認知症になっても、何もできなくなるのではなく、住み慣れた地域で仲間とつながりながら、希望をもつて自分らしく暮らし続けることができる！という考え方のことです。



認知症になっても、 その人らしさは変わらない

10月4日(土)に中央公民館・市民会館にて、宜野湾市・医療法人アガペ会共同主催の認知症月間イベント「一人ひとりができることに目を向けよう!見て考えて学ぼう『新しい認知症観』」が開催されました。

会場には、お子さんからシニア世代まで300名以上が来場され、大盛況の1日となりました。



周囲の助けを借り、認知症を受け入れてから笑えるように

「泉とオバーのよんな～笑って介Goシーズン2」では、お笑いタレントの喜舎場泉さんと山田力也さん扮するオバーが、実体験をもとにした認知症介護のエピソードや家族の絆をユーモアたっぷりに表現し、笑いあり涙ありの心揺さぶられるステージとなりました。

泉さんは、お母さんの認知症を受け入れるまでに約5年かかったそうです。つらかったことを笑いに変えて届けてくださる前向きな泉さんの姿にも胸が熱くなりました。また、サプライズで登場した姪っ子さんやお母さんの言葉や歌う姿にも心が温まり、会場は大きな拍手で包まれました。



病気を見るのではなく、まずはその人を見ること

トークディスカッションでは、沖縄県認知症希望大使の新里勝則さんがこれまでの人生をどう過ごされたかを語るなかで、認知症になっても経験・価値観・感情など、いわゆる“その人らしさ”は変わらないことが伝わり、認知症の捉え方が前向きに変わるお話をでした。

また、支える側の心構えとして、本人ができることは奪わずに苦手なことを周りがサポートすること、その人を見ること、一人で抱え込まず地域の人や介護サービスに頼ることなどが語られました。泉さんとオバーは、「認知症になっても、絶対に笑うことはやめたくない」と話し、いつになっても自分らしさやユーモアを持ち続ける大切さを考える機会になりました。